

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00538

研究課題名(和文) 所有・所在概念の連続性とその言語化にはたらく諸条件に関する言語横断的比較対照研究

研究課題名(英文) A Cross Linguistic Approach to Possession, Existence and the Conditions on their Linguistic Realization

研究代表者

今泉 志奈子 (Imaizumi, Shinako)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：90324839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、従来個体間の関係性規定概念として位置づけられてきた「所有」と「所在」の両概念がひとつの連続的現象であることを類型論的視点から立証するとともに、個体と事象との関係(「事象の所有」)を規定する所有の意味関数HAVEを仮定した語彙分解的アプローチによる理論的整備を試みた。特に、経験者主語の文法的ふるまい、事象的な意味特性をもつ名詞句、ヴァレンス拡大、所有文の主題と述部の特性の4項目に着目し、日本語、ドイツ語・英語等のゲルマン語系言語、スワヒリ語等のバントゥ諸語における各構文を整理することで両概念の連続性の実態に迫り、ヒトの言語において「所有」概念が果たす役割に多角的にアプローチした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「所有」概念をめぐる先行研究の大半は「所有者」の視点から所有現象を捉えているが、本研究は「被所有者」の側から諸構文を捉え直すことに主眼を置くことで、所有と所在をめぐる文法現象における未解決の問題に新たな角度から光を当てることができた。また、英語・ドイツ語・スワヒリ語等のバントゥ諸語を主な分析対象とする各メンバーが常に日本語との対照言語学的視点を意識して調査・報告を実施した成果は、日本語研究の裾野を広げるとともに、日本語教育にも資するものと思われる。また、本研究が提示した語彙分解的手法による理論的整備は、従来、背反的に捉えられがちな構造主義的手法と認知主義的手法の融合例としての意義もあるだろう。

研究成果の概要(英文)：The principal objective of this study is to reconsider the syntactic and semantic properties of the notions of "possession" and "location", which has been assumed to be overlapped with each other, and to clearly show that these two notions consist a continuous phenomenon. By focusing upon the grammatical issues such as Experiencer subjects, eventive nouns, valence-increasing alternations and subject-predicate relationship of possession sentences in Japanese, English, German and Swahili and other Bantu languages, we have clarified the various conditions on possession constructions in these languages. Based upon our cross-linguistic approach, we have shed light upon the continuity of the notions of "possession" and "location" and shown that the syntactic-pragmatic properties "possession" constructions in human languages are adequately predicted and explained by assuming the function HAVE which specifies the relationship between individual and event, i.e., possession of events.

研究分野：言語学

キーワード：「所有」と「所在」 経験者主語 事象(コト)の所有 ヴァレンス拡大 外部所有者表現 日・英・独語比較対照 日・英・バントゥ諸語比較対照

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

「所有概念」の見直し 先行研究における「所有」概念は、常に個体間の関係（人（＝所有者）に人・モノがある）を規定するものと位置づけられてきたが、2011～2013 年度科研費研究課題「ヴァレンス拡大とその形態統語論的実現に関する日・英・独語間の語彙意味論的比較研究」（代表者：藤縄康弘（＝本研究課題分担者）、分担者：今泉志奈子（＝本研究課題代表者））は、そこに再検討の余地があり、個体－事象間の関係（人（＝所有者）にコトがある）という概念の導入が有益であることを指摘した。そこでは、CAUSE 関数を仮定した使役構造を起点とした反使役化（＝動作主の抑制）に代表される「ヴァレンス縮小型」の分析（＝典型的には、他動詞文の動作主を抑制するプロセスを仮定することで自動詞文を派生するなど；Jackendoff(1990), Levin and Rappaport-Hovav (1995)）に比して、周縁的現象として位置づけられがちであった一連の「ヴァレンス拡大」現象（例：日本語の間接受動、英語の Have 使役・受動、独語の自由な与格現象など）に着目し、「ヴァレンス拡大」が、本質的に Wunderlich (2000) 等による「所有者拡張（Possessor Extension）」（＝できごとの外側にそのできごとに関与する個体を想定する）として捉えられることを主張した。これにともない、日・英・独の各言語内で個体－事象間の関係を規定する「事象の所有」という共通の意味論的基盤が存在することが明らかとなった（図1を参照）。

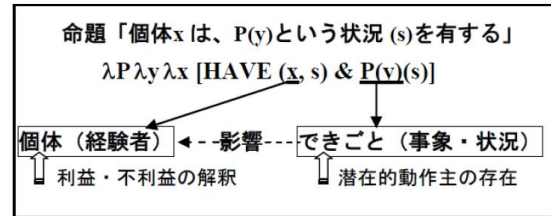


図1：事象の所有

「事象の所有」を仮定することの意義と言語横断的妥当性の検証 「事象の所有」を仮定するアプローチの最大の意義は、「ヴァレンス拡大」を伴う文法現象が、なぜ通言語的に「利益・不利益」や「潜在的動作主の存在」という解釈を伴うかという点についても統一的な説明が可能になるという点にあった（今泉・藤縄 (2014) など）。このアプローチの妥当性をさらに追及したものが、2014～2017 年度科研費研究課題「状況の主体的位置づけとしての所有概念とその言語的実現に関する日・英・独語比較研究」（代表者：藤縄、分担者：今泉）である。これは、日本語・英語・ドイツ語における「所有・所在」概念について、所有者と場所との連続性とその統語的実現、措定的コンピュータ文との範列性、ヴァレンス拡大、主題概念の4つの視点から問い直す試みである。「所有」と「所在」の連続的実態（の一端）の解明を通じて、ヒトが外界を認識する際に、個体とできごと間の関係性を文脈や世界知識のなかに主体的に関連づけながらいかにして言語化するのか、そのプロセスについて多くの示唆を得たことから、本研究課題の着想が得られた。

## 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、①経験者主語の文法的ふるまい、②事象的な意味特性をもつ名詞句、③ヴァレンス拡大、④所有文の主題と述部の特性の4点に視点を絞り、所有と所在の概念の連続的実態を汎言語的に検証すること、ならびに、語彙分解的手法によってこれまでに蓄積された記述研究の理論的整備を試みることである。具体的には、日本語・英語・ドイツ語を中心とするゲルマン系言語、バントゥ諸語を主な分析対象とし、ヒトが外界を認識し言語化する際に「所有」概念が果たす役割を探る包括的研究の第一歩とすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

研究代表者・今泉（愛媛大学）は、日・英語の所有文・所在文の個別的分析・日英対照を分担するとともに、全体の構想・立案・とりまとめを担当した。研究分担者・藤縄（東京外国語大学）は、ドイツ語の所有文・所在文の個別的分析、日独対照、英独対照を分担し、理論的整備については今泉と藤縄が協働した。研究分担者・米田信子（大阪大学）はバントゥ諸語の所有文・所在文の個別的分析、日・英語との対照とともに、タンザニア、ウガンダ現地調査も担当した。その他、研究協力者として、樋口康一氏（愛媛大学客員教授（＝当時）、エバード・イハープ氏（サウジアラビア国立アラブ・イスラーム学院講師（＝当時）、Rasgur Mdzeschentshlong 氏（京都大学大学院）、高橋美穂氏（東北大学（＝当時））にも各言語の事例報告、助言等の協力を頂いた。

研究期間の最初の2年間（コロナ禍による研究期間延長のため実質的には3年間）は、経験的・記述的アプローチを中心にデータベースの整備を進めた。特に初年度は、メンバー間の協働体制の基礎を固め、問題の所在や理論的背景についての共通認識を明確にするための基盤づくりに注力し、2019年度はワークショップ『所有・所在・できごと』（於：愛媛大学）において研究協力者がアルタイ諸語、チベット・ビルマ諸語、アラビア語の事例を報告し、活発な討論が行われた。2020年度はコロナ禍の影響を受け、海外への渡航、国内移動を伴う打ち合わせ等を一時的にすべて中止せざるを得なくなったが、研究期間を1年間延長することを決定し、その間はデータベース整備を進めた。最終年度は対面で最終報告会を再開、プロジェクトを総括するとともに発展的なかたちで次年度以降の新規課題へ繋げることができた。

## 4. 研究成果

### 4.1 経験者主語の文法的ふるまい

本研究課題の出発点は、下記のような所在文に潜む所有者が経験者としての解釈を伴うケー

スである (今泉 (2019, 2020a,b) ) :

- (1) a. 坂の上に学校がある。
- b. There is a school on the hilltop.

(1)は「坂の上に」という後置詞表現が場所をあらわし、その場所に学校が存在しているという所在文である。英語では(2)の there 構文がこれに相当するが、所有動詞 have による言い換えが可能である :

- (2) We have a school on the hilltop.

松井 (2011) が指摘するように、there 構文と have 構文はともに小節 [a school on the hilltop]を補文にとる点では共通している一方、前者では虚辞 there が主語位置に置かれるのに対し、後者は動詞に have を選ぶため there 構文には存在しなかった主語が関与する点に違いがある。つまり、there 構文は、坂の上に学校があるという事実を中立的述べるものであるのに対し、have 構文を用いると「坂の上に学校がある」という状況に主語が何らかのかたちで関与している(ここでは、学校が坂の上にあるので毎日の通学が大変だと思っている、など) といった経験者解釈を伴うのである。(1a)の日本語における所在文についても同様に、(3)のように「所有者」としての主語を明示すると、have 構文と同様の経験者解釈が生じる :

- (3) 私たち (に) は、坂の上に学校がある。

(3)は、主語 (=私たち) が坂の上にある学校に通っていることを含意し、「坂を毎日のぼらなくてはならないため通学が大変だ (が景色がよいから楽しい)」 といった判断の主体となり得る。(1a)の所在解釈は英語の there 構文に、(3)の所有解釈は have 構文にそれぞれ対応すると考えられるが、所有解釈における「所有者」は、必ずしも have の目的語の物理的な所有者とは限らない。

(3)で坂の上に学校があるから通学が大変だと思っているのは、学校の所有者ではなく、その学校に通っている生徒たちである。つまり、

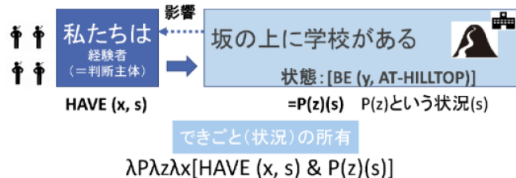


図 2 : HAVE 関数による意味記述 (今泉 (2019) )

(2)(3)タイプの所有文に共通しているのは、主語としてあらわれた個体が have の補文に埋め込まれた小節が規定する状況ないしはできごとから影響を被る関係性が成り立っているという点である。本研究課題では、従来の所有概念を拡張し、主語位置にあらわれる個体が「事象を所有している」と仮定し、この個体と事象

との関係性を捉えるための意味記述モデル (図 2) を提案することで、経験者主語に特徴的な文法的ふるまいを適切に予測、説明できることを検証した。また、(3)の経験者「私たち」をいわゆる多重主語構文の外部主語に相当するものと捉えることで、種々の言語における一連の外部所有者表現との比較が可能となる。藤縄 (2019a), Fujinawa (2020a) は、そうした試みの一貫として、ドイツ語における与格生起とその結果性を再検討したものである。与格の基底にある「所有」はモノではなく「事象の所有」であること、haben (have) 所有文も「事象の所有」という意味特性は共有しつつ自由与格が共起できない形容詞述語を伴う点で補完的關係が成り立っていることを論じ、共通の意味基盤として HAVE 関数を仮定した上記モデルの妥当性を検証した。

さらに、タンザニアで調査を行った米田は、存在文 (所在文) における主語の現れ方に関するデータを複数のバントゥ諸語から収集し、主語のプロパティに見られる言語差を検討した。その成果は主題性を中心に主語のプロパティに見られるバリエーションについて国際学会において発表した (Yoneda & Morimoto (2018a, b))。また、科研費プロジェクト研究会「所有・所在」(於: 愛媛大学) における研究報告 (米田 (2019) ) は、スワヒリ語における不可譲渡構文、場所格倒置、適用形 (動詞があらわす状況から影響を被る受影者との関係性をマークする) 等の諸現象を「事象所有」モデルによって捉える可能性を示唆するものであった。

#### 4.2 事象的な意味特性を持つ名詞句

「できごとの所有」関係を規定する HAVE 関数を仮定した分析がもっとも有効性を発揮するのは、(4)の「(血・熱を) 出す」のように、動作主の意図的なはたらきかけが関与しないようなできごとをあらわす他動詞文においてである (今泉 (2020) ) :

- (4) a. 健が額から血を出した。
- b. 健が風邪をひいて熱を出した。

これらの他動詞文の主語は意図的動作主ではなく、むしろ、(5)のような「出す」に形態的に対応する自動詞「出る」があらわす状態変化から影響をうける個体である :

- (5) a. (健<sub>i</sub>は) 額<sub>i</sub>から血が出た。
- b. (健<sub>i</sub>は) 風邪をひいて熱<sub>i</sub>が出た。

本研究課題が着目したのは、(4a,b)の経験者主語が「血が出る」(=(5a))「熱が出る」(=(5b)) という状態変化が起こる場所である「額」や「発熱している身体」(もしくはその「熱」そのもの)の所有者でもあるという点である。(5a,b)の「出る」は「が」格でマークされる内項をひとつだけ選ぶ非対格自動詞であり、経験者は統語的な項とは関係づけられないが、「は」でマークされる主題として導入することが可能であり、(4)(5)の意味的な類似性を捉えるためには(4)の「出す」と(5)の「出る」が(6)のような「事象の所有」構造を共有すると仮定するアプローチが有効となる :

- (6) a. 他動詞「出す」の意味構造 : HAVE(x, [BECOME([BE (y, HIGHER)])])  
 項構造 : EXT <x:1>, INT <y:2> 1:健, 2:熱

b. 他動詞「出る」の意味構造：HAVE(x, [BECOME([BE (y, HIGHER))])

項構造：EXT < >, INT <y:2> 2:熱

ここでポイントとなるのが、(7)のような所有文との関連性である：

(7) 健に熱がある。

(7)の所有文における「ある」の特徴は、「子どもに家がある」「子供に才能がある」といった状態的な所有関係ではなく、上述の(4)(5)の「発熱」のような状態変化の解釈を伴う点である。「明日、熱があれば、もう一度病院に来てください」の「明日」のように未来をあらゆる表現と共起できることから、「ある」が動的な状況をその意味の一部に含有しているものであることがわかる（「#明日、健に才能がある」は意味的に逸脱した文である）。そこで、状態的ないわゆる所有関係（＝個体間の所有関係）については、つぎの(8a)のように、HAVE 関数の第2項に所在をあらゆる状態関数が埋め込まれていると仮定し、動的な状態変化を伴う所有の「ある」についてはできごとが埋め込まれていると仮定することで、両者が広く「所有」概念では共通している一方、(8b)のように第2項に状態変化の BECOME 関数が埋め込まれた「ある」のみに「被影響」の動的な解釈が生じることを捉えることができる：

(8) a. 健に (は) 才能がある。HAVE (x, [BE(y, AT-x)])

b. 健に (は) 熱がある。HAVE (x, [BECOME([BE(y, HIGHER))])

こうしたアプローチは、岸本 (2005) における「生まれる」「誕生する」等の動詞が動的な所有関係の発生をあらゆる現象や「東京にジョンの子供がいる」から派生されると仮定されている「ジョンには東京に子供がいる」等の所有文の拡張用法にも統一的説明を与えることができる。

さらに、藤縄 (2019b) は、この「事象の所有」という観点からドイツ語自由与格の意味論を所有代名詞による表現との対比において再検討し、所有物が所有される事象によって限定されるという点にこの構文の本質があることを明らかにするとともに、所有物の限定表現（定冠詞、所有代名詞、不定・無冠詞）の分布を説明するモデルを提案した。また、こうした事象の所有者は、総じてその事象に何らかのかたちで関与する立場にあり、米田 (2019) が指摘するように、ヘレロ語の適用形構文とも通底する部分が少なくない。しかし、現時点での研究では、「関与」という概念そのものの規定がまだ充分とは言えず、その関与の度合いが種々の文法現象とどのように相関しているのかという点についても今後の課題である（＝2022年度に採択を受けた新規科研究費課題「所有・関与・経験概念の語彙表示と言語化にかかる制約への言語横断的研究」（代表者：今泉、分担者：藤縄、米田））。

#### 4.3 所有文の主題と述部の特性

前節に挙げたような所有者であり事象の経験者でもあるような所有文の主題の特性は述部の特性との関連性から見直すことでさらに多角的なアプローチが可能になる。Fujinawa (2020b)は「思う」を意味する2つの動詞 *glauben* (=believe) と *finden* (=find) を対象にしたコーパス調査を通して、各動詞における非定形補文表現 (zu 不定詞句、小節) の特異性がいずれも、直接知覚（＝経験主による事象の所有）を意味する *sehen/hoeren* (=see/hear)+ ECM のそれと体系的に関連づけられるとの見通しを論じたものである。また、米田は、ウガンダとタンザニアのバントゥ諸語を中心に、主語の主題性と存在表現の形式との関係に関するデータを収集、その結果、バントゥ諸語の中には、主語の主題性によって存在表現の形式が異なる言語と主語の主題性が存在表現の形式に影響しない言語があることが明らかになり、さらに前者はそのレベルが言語によって異なることも明らかとなった。

#### 4.4 ヴァレンス拡大

上述したとおり、従来の使役交替研究では、CAUSE 関数による使役構造を起点とし、原因事象のなかの動作主を抑制することで使役構造を持たない自動詞文を派生する（反使役化）、もしくは、動作主を存在量化することで基底に使役構造は残しつつ動作主が音形をもって具現しないような自動詞文を派生する（脱使役化）といった「ヴァレンス縮小型」の分析が主流であった。しかし、こうした分析では、次の(9a-c)の「飛ばす」のように、同じ他動詞構造を持っているように見えるが、主語の関与の度合いがそれぞれ異なるような場合の書き分けができないことが課題のひとつである：

(9) a. 士官学校の卒業式で候補生全員が帽子を飛ばした。

b. 大谷選手が帽子を飛ばして力投した。

c. 風が帽子を飛ばした。（≒風で帽子が飛んだ）

さらに、CAUSE 関数は1項目に原因事象(e<sub>1</sub>)、2項目に結果事象(e<sub>2</sub>)をとり、両者の因果関係を規定するため、試合の勝敗や成功・失敗など、行為者が原因事象となるはたらきかけ行為を発動することはできても、その結果事象までは制御可能性を持たないような現象や結果事象の成立によって行為者が利益・不利益を被ることが読み込まれるような現象については捉えきれないという点にも限界がある。

(10) a. 健はお気に入りの花瓶をうっかり割ってしまった。

b. 健はお気に入りの花瓶が割れてしまった。

c. 健はお気に入りの花瓶を猫に割られてしまった。

(10a)の「健」が行為者でもあり得るのに対し、(10b)の「健」は「風で花瓶が倒れて割れた」というできごとから間接的に影響を被る受影者、(10c)の「健」は「猫が健のお気に入りの花瓶を割った」というできごとの被害者である。つまり、関与の度合いこそ微妙に異なるが、いずれも「健」が事象の関与者である点においては共通しており、ヴァレンスを減らさない自動詞化やヴァレ

ンスを増やす間接受動文など、従来の研究では周縁的なものとして位置づけられてきた一連の現象に統一的に捉える直す可能性を示唆した点も、本課題研究の成果のひとつである（今泉(2022)）。

また、こういった使役交替（自他交替現象）との関連において、藤縄(2022)は、自由与格項を「事象の所有者」と見なす点で本研究課題と共通の枠組みによっている Schäfer(2008)に着目し、反使役動詞と共起した同項の解釈を「反使役化の形態論・統語論に条件づけられている」としていた点について経験的な事例調査に基づいて再検討した結果、この項の疑似的使役主として解釈の可否はむしろ意図される反使役的变化の質（「有の状態」から「無の状態」への変化なのか否か）に負っているとの見通しを得ている。Yoneda(2021, 2022)は、スワヒリ語の使役交替の分析に通時的視点を入れることで先行研究の分析とは異なる顕著な使役型指向を明らかにしたものである。さらに、本課題研究最終報告会においてコメンテーターをつとめた米田は「事象の所有」の視点からヘレロ語の適用形に見られる受影機能の再検討にも着手しており、本件は上述の新規課題に引き継がれる。

#### 4.5 今後の展望

本研究課題で得られた「事象の所有」へのアプローチを活かし、今後は未整理の部分が多く残されている「関与・経験」概念を見直すことで、より包括的な語彙表示を探究することが課題である。その際には自動詞文に行為者項が表す現象（先生が学生につかまった・見つかったなど；岸本(2020)も参照）やドイツ語の移動動詞の与格構文（高橋(2022)）なども分析の射程に入ってくる。また、言語使用の実態に基づく記述の充実を図りつつ、語彙分解的手法による動詞の語彙表示を探る本研究課題のアプローチは、従来、背反的に捉えられがちな構造主義的手法と認知主義的手法の融合を探る試みであり、こうした試みが以上のような成果を得られたこともまた今後の研究に活かされる部分であろう。

#### <引用文献>

- ①藤縄康弘(2019a)「ドイツ語の外部所有者表現と結果性」ワークショップ「構文の使用と意味」（於：東北大学）
- ②藤縄康弘(2019b)「ドイツ語の自由与格：コトの所有とモノの定・不定」科研費プロジェクトワークショップ「所有・所在・できごと」（於：愛媛大学）
- ③Fujinawa, Yasuhiro(2020a)“Freier Dativ: Erneutes Nachdenken über die situative HABEN-Relation” Hiroyuki Miyashita, Yasuhiro Fujinawa, and Shin Tanaka (eds.), *Form, Struktur und Bedeutung: Festschrift für Akio Ogawa*, Tübingen: Stauffenburg, pp. 85-108.
- ④Fujinawa, Yasuhiro(2020b)“Prädikation und infinite Komplemente bei glauben und finden”日本独文学会 語学ゼミナール(オンライン開催)
- ⑤藤縄康弘(2022)「事象の所有者としての経験主：ドイツ語反使役における与格の解釈をめぐって」科研費プロジェクト「所有・所在」最終報告会（於：愛媛大学）
- ⑥今泉志奈子・藤縄康弘(2014)「事象の所有と複雑述語」岸本秀樹・由本陽子(編)『複雑述語研究の現在』ひつじ書房, pp. 291-315.
- ⑦今泉志奈子(2019)「所有と所在概念の言語化をめぐって」科研費プロジェクト研究会「所有・所在概念の連続性とその言語化にはたらく諸条件に関する言語横断的比較対照研究」（於：愛媛大学）
- ⑧今泉志奈子(2020)「動詞の意味構造における「所有」と「できごと」」『愛媛大学法文学部論集 人文学編』48, pp. 61-77.
- ⑨今泉志奈子(2022)「所有・所在から関与・経験概念へ」科研費プロジェクト「所有・所在」最終報告会
- ⑩Jackendoff, Ray(1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- ⑪岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版.
- ⑫岸本秀樹(2020)「語彙概念構造と日本語研

- 究：反使役化と脱使役化を巡って」『日語偏誤与日語教学研究』第五輯, pp.3-29.
- ⑬Levin, Beth & Malka Rappaport Hovav(1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- ⑭松井千枝(2011)「存在文—there 構文と have 構文」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』41, pp.81-92.
- ⑮Schäfer, Florian(2008) *The Syntax of (Anti-)Causatives. External arguments in change-of-state contexts*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- ⑯高橋美穂(2022)「ドイツ語与格構文の解釈—移動動詞を例に—」科研費プロジェクト「所有・所在」最終報告会
- ⑰Yoneda, Nobuko & Yukiko Morimoto(2018a)“Degrees of Topicality in Bantu Subjects.” The 7th International Conference on Bantu Languages. (於：The River Club Mowbray, ケープタウン)
- ⑱Yoneda, Nobuko and Yukiko Morimoto(2018b)“Proto-Bantu subject and topic.” International Conference on Reconstructing Proto-Bantu Grammar. (於：ゲント大学)
- ⑲Wunderlich, Dieter.(2000)“Predicate composition and argument extension as general options - a study in the interface of semantic and conceptual structure” Stiebels, B. et.al. (eds.), *Lexicon in Focus*, Berlin: Akademie, pp.247-270.
- ⑳米田信子(2019)「バントゥ諸語の所有文と存在文:スワヒリ語の例」(於：愛媛大学)
- ㉑Yoneda, Nobuko(2021)“Inchoative-Causative verb alternations in Swahili” the 10th World Congress of African Linguistics (於：ライデン大学, オンライン開催)
- ㉒Yoneda Nobuko(2022)“Non-causal/ Causal verb alternations in Swahili”, *Linguistique et Langues Africaines* in the special issue ‘The noncausal-causal alternation in African languages.’ (ページ未定)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoneda Nobuko	4. 巻 the special issue
2. 論文標題 "Non-causal/ Causal verb alternations in Swahili"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Linguistique et Langues Africaines	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 米田信子	4. 巻 別冊2巻
2. 論文標題 「バントゥ諸語の参照文法書 バントゥ諸語研究における参照文法書の位置づけ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『参照文法書研究』（アジア・アフリカ言語文化研究）	6. 最初と最後の頁 213-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/116967	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 今泉志奈子	4. 巻 第23号
2. 論文標題 「恋スル言語学 「恋」に落ちて、「愛」に落ちないのはなぜか」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人文学論叢』	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 今泉志奈子	4. 巻 48
2. 論文標題 「動詞の意味構造における「所有」と「できごと」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学科編	6. 最初と最後の頁 61-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhiro Fujinawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Freier Dativ: Erneutes Nachdenken über die situative HABEN-Relation (注: uberのuはウムラウト)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Hiroyuki Miyashita, Yasuhiro Fujinawa, and Shin Tanaka (eds.), Form, Struktur und Bedeutung: Festschrift für Akio Ogawa, Tübingen: Stauffenburg (注: fürとTübingenのuはウムラウト)	6. 最初と最後の頁 85-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田信子	4. 巻 -
2. 論文標題 「ヘレ口語のとりたて表現」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 野田尚史 (編) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』東京: くろしお出版	6. 最初と最後の頁 237-253
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 今泉志奈子
2. 発表標題 「所有・所在から関与・経験概念へ」
3. 学会等名 科研費プロジェクト「所有・所在」最終報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤縄康弘
2. 発表標題 「事象の所有者としての経験主: ドイツ語反使役における与格の解釈をめぐって」
3. 学会等名 科研費プロジェクト「所有・所在」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoneda Nobuko
2. 発表標題 Properties of the Subject in Bantu Languages
3. 学会等名 SPS-FWO Joint Project Kick off Meeting (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoneda, Nobuko
2. 発表標題 Non-locative uses of Locative enclitics in Herero (R31)
3. 学会等名 The 8th International Conference on Bantu Languages (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoneda, Nobuko
2. 発表標題 Inchoative-Causative verb alternations in Swahili
3. 学会等名 The 10th World Congress of African Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yasuhiro Fujinawa
2. 発表標題 Praedikation und infinite Komplemente bei glauben und finden
3. 学会等名 日本独文学会 語学ゼミナール・オンライン 2020
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 今泉志奈子
2. 発表標題 「所有」と「所在」 動詞の意味構造における「所有」と「できごと」
3. 学会等名 科研費プロジェクトワークショップ「所有・所在・できごと」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤縄康弘
2. 発表標題 ドイツ語の自由与格：コトの所有とモノの定・不定
3. 学会等名 科研費プロジェクトワークショップ「所有・所在・できごと」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今泉志奈子
2. 発表標題 動詞の意味構造における「所有」概念をめぐって 所在・所有・関与
3. 学会等名 神戸女学院大学大学院 英語英文学研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今泉志奈子
2. 発表標題 「所有と所在概念の言語化をめぐって」
3. 学会等名 科研費プロジェクト研究会『所有・所在概念の連続性とその言語化にはたらく諸条件に関する言語横断的比較対照研究』（於：愛媛大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤縄康弘
2. 発表標題 「ドイツ語の外部所有者表現と結果性」
3. 学会等名 ワークショップ「構文の使用と意味」(於:東北大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤縄康弘
2. 発表標題 「ドイツ語の自由与格とイベント」
3. 学会等名 科研費プロジェクト研究会『所有・所在概念の連続性とその言語化にはたらく諸条件に関する言語横断的比較対照研究』(於:愛媛大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米田信子
2. 発表標題 「バントゥ諸語の所有文と存在文:スワヒリ語の例」
3. 学会等名 科研費プロジェクト研究会『所有・所在概念の連続性とその言語化にはたらく諸条件に関する言語横断的比較対照研究』(於:愛媛大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 米田信子・初田漠
2. 発表標題 「スワヒリ語ザンジバル方言における移動動詞としてのpandishaとshusha - 季節風による「上下」の関係 - 」
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会(於:北海道大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 YONEDA, Nobuko and Yukiko Morimoto
2. 発表標題 "Degrees of Topicality in Bantu Subjects."
3. 学会等名 第7回国際バントゥ諸語学会（於：The River Club Mowbray, ケープタウン, Cape Town, 南アフリカ）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 MORIMOTO, Yukiko and Nobuko Yoneda
2. 発表標題 "Cross-Bantu Variation in the Properties of Subjects."
3. 学会等名 第9回世界アフリカ言語学会議（於：ムハンマド5世大学, ラバト, モロッコ）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 YONEDA, Nobuko and Yukiko Morimoto
2. 発表標題 "Proto-Bantu subject and topic."
3. 学会等名 International Conference on Reconstructing Proto-Bantu Grammar.（於：ゲント大学, ゲント, ベルギー）（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 鄭聖汝、柴谷方良、堂山英次郎、西岡美樹、Rajesh Kumar、Akua Campbell、Haowen Jiang、田村幸誠、米田信子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 576
3. 書名 『体言化理論と言語分析』	

1. 著者名 梶茂樹、小森淳子、古閑恭子、仲尾周一郎、若狭基道、宮崎久美子、品川大輔、古本真、高橋康德、安部麻矢、阿部優子、米田信子、Seunghun J. Lee	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 327
3. 書名 『アフリカ諸語の声調・アクセント』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤縄 康弘  (Fujinawa Yasuhiro)  (60253291)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授   (12603)	
研究分担者	米田 信子  (Yoneda Nobuko)  (90352955)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授   (14401)	
研究分担者	樋口 康一  (Higuchi Koichi)  (20156574)	愛媛大学・法文学部・客員教授   (16301)	2019年6月13日まで。

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	エベード イハープ・アハマド  (Ebeid Ehab Ahmed)		
研究協力者	ボン ジョン  (Peng Zitong)		氏名別標記は、Rasgur Mdzeschentshlong

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高橋 美穂  (Takahashi Miho)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関